

「嗚呼、大いなる英吉利よ」

高校1年 Y・Y

八月二日。誕生日翌朝、私はイギリスへ発った。ずっと憧れてきたヨーロッパでの十四日間に胸を躍らせると同時に、親と四日以上離れたことの無かった私が果たして最後までやり遂げられるか不安も積もっていた。

しかし、それは杞憂だった。イギリスでは、もちろん一日も日本の自宅のことを忘れることはなかったが、恋しく思い出すこともなかった。毎日がわりに忙しかったというものがあるが、なによりホストファミリーの優しさと愛情によるところが大きいだろう。

私とペアの子のホストファミリーは母子家庭で、しかもフランスに旅行に行っていた十八歳の娘さんのアミリアが帰ってきた最後の二日間以外、家にはお母さんのジョーしかいなかった。

ジョーは私たちにとても親切だった。ウォーキングやショッピング、バルにも連れて行ってくれた。イギリス料理は不味いと聞いていたが、彼女の料理はいつも美味しかった。ただ、量が多いのと、ランチボックスにお菓子しか入っていなかったのには少々参ってしまったが。

ランチボックスにはいつもチョコバーやクッキー、ジュースなどがギュウギュウに詰まっており、その中でも私を悩ませたのはピーナツバターサンドだった。

日本ではあまり食べる機会が無いので自分でも気づいていなかったのだが、どうやら私はピーナツバターが大の苦手らしい。

結局、それを彼女に告げることはなかったが、今思えば我慢することもないのに、と自分の怠惰さに呆れる。英語でそれを伝えるのより、我慢して食べたほうが楽だと思ったのだ。正直に言って、私は英語のライティングやリーディング、リスニングは人よりは出来るが、スピーキングとなるとそれほどでもない。文法にとらわれて、正確な英語でないなら口にしたくないと思ってしまっていたのだ。

けれども、ジョーとの会話の中では英語を使う以外に無いわけで、そうすると、単語の羅列のような文でも、文法に悩んで何も言わないよりはよっぽどいいのだった。それを実感できただけでも、この語学研修の大きな収穫だった。

さて、食事のことに話を戻すと、私たちの朝食はたいていスクランブルエッグトーストで、ジョーはポリッジだった。ポリッジはオートミールのようなもので、食感はおかゆに近いのだが、おかゆと違うのは、そこにはちみつやシナモンシュガーをかけて食べるころだ。私たちも一度朝食で食べたのだが、「甘いおかゆ」を体が受け付けず、それっきりであった。

夕食は毎日いろいろな国のいろいろな料理が出た。パスタやピザのときもあれば、東南アジアの焼きそばのようなものときもあったし、イギリス料理だとフィッシュ&チップ

スやミートパイなんかもあった。そしてその後には決まってデザートとティーだった。デザートは美味しいのだが、非常に甘かった。カスタード・プディングやチョコレート・プディング、ライス・プディング…こうして思い起こすとプディング率が高いようだ。

そんなプディングの中でも私が忘れられないのが、イートン・メス。これはメレンゲ、クロテッドクリーム、イチゴを混ぜたデザートで、イギリスの伝統料理だそうだ。ホームステイの初日のデザートがこのイートン・メスで、食事が口に合うかどうかを一番案じていた私はとても安心したのだった。言うまでもなく、イートン・メスが美味しかったからである。

しかしながら、一週間も洋食が続くとさすがに日本食が恋しくなってきた。それを知ってか知らずか、ジョーが私たちを回転寿司に連れて行ってくれた晩があった。私たちは久しぶりの日本食とあって興奮すると同時に、もし寿司とは言い難い寿司だったらどうしようとおっかなびつくりといった節もあった。だが、それはいい意味で裏切られた。寿司はちゃんと寿司であった。ただ、驚かされることもしばしばだった。

まず、その店名が、「YO! SUSHI!」。いろんな意味でとんだご挨拶である。そしてメニュー。たこ焼きにお好み焼き、サラダにカツに枝豆など居酒屋状態である。ただ、日本の居酒屋にはない独特な料理も多々ある。ふりかけが大量にかかったフレンチフライやストロベリーチーズケーキもちなどは序の口で、かっぱ巻きの具がアボカドだったり、蛇口からお湯でなくスパークリング・ウォーターが出てきたり、中華料理がしれっと並んでいた。

中でもひどかったのが、中・韓・日のごちゃまぜな、ごま油入りのピリ辛チャーハン。いくらこれから三国が互いに手を取り合っていかなければならないとはいえ、料理は手をつなげないぞ、イギリスよ。

店に入ったのは「YO! SUSHI!」だけだったが、ほかにも「WAKAME」やチェーン店の「WAGAMAMA」など街の至る所にユニークな名前の日本食の店があった。それから、ブティックで「SUPER DRY 極度乾燥しなさい」という店があった。日本人からすると思わず吹き出してしまうネーミングだが、日本語や中国語のワンポイントが入った服がCOOLだとイギリスの若者に人気なのだそう。店内に足を踏み入れると、かなりポップでジャンクな印象。しかし、服のデザインはなるほど不思議な言葉のチョイスである。中でも意味不明だったのは「OSAKA 6 会員証な」とプリントされたTシャツ。いったい何を主張しているのか。謎である。

言語といえば、イギリスはもちろん英語だが、アメリカも英語だ。しかし、イギリス人からすると、アメリカ英語は「英語もどき」だという。ジョーはアメリカ英語は教育によくないからイギリス英語をもっと聴くべきだと言い、英語研修の先生は私たちがアメリカ英語を使うと強めの口調で訂正した。それに、どことなくだが、たいていのイギリス人にアメリカを馬鹿にしているところはあった。もっとも、皮肉なことに、馬鹿にするわりに食生活はアメリカ型だが。

とはいえ、アメリカほど肥満体型の割合は高くない。私は幼いころアメリカに住んでいたことがあり、そのときは全体的におデブさんが多い印象だったが、イギリスは期待を裏切らず、街には英国紳士とレディしか歩いていなかった。ただ、全員が美男美女でないことには驚いた。よく考えれば当たり前のことだが、顔の彫りが深いとはいえ美男美女の割合自体はどの国も同じなのだと感じた。

このように、新たな発見や興味深い知識を多く得ることができたという点では、かなりエキサイティングな日々だった。

イギリスでは、気に入らなければ返品できるよう、プレゼントにレシートをつけて渡すこと。学校でドイツ語・フランス語・スペイン語・ラテン語を習うこと。マクドナルドが外観を壊さないために赤くないこと。

こんな小さな発見と知識のすべてが私をわくわくさせたが、一番の素晴らしい経験はホストファミリーと出会えたことだ。

ホストファミリーと過ごした時間はそのすべてが宝物だが、その中で最もいい思い出となったのは、お別れの前日の日曜日だ。

フランスから帰ってきたアミリアさんも一緒に午前中から出かけた。家から車で一時間ほどのところにあるオーガニックカフェで昼食をとった。看板メニューはローストチキンだったが、ジョーもアミリアもベジタリアンだったため別のものを注文し、私たち二人だけがローストチキンを頼んだ。ローストチキンは美味しかったが、骨付きで食べるのにかなり時間がかかってしまった。それでも二人は嫌な顔一つせず、私たちが食べ終わるまでいろいろな話を聞かせてくれた。

アルプス山脈を登ったときの景色の素晴らしさ。イタリアでかけていた眼鏡を盗まれた友達の話。お祖母さんの家が作家のブロンテ三姉妹の生家の近くだったこと。アミリアはブロンテ作品はもちろん、さまざまな本を読むのだということ。

オーガニックカフェで、チキンは私の腹を満たしたが、それ以上に二人の優しさと人柄、それと数々のエピソードは私の心を大いに満たしてくれた。

そのあと、四人で森を通り抜けてコッツウォルズ・ストーンの採掘現場を見学した。スタッフの方の案内や説明は私にはいささか難しく、少ししか理解できなかったが、鮮明に覚えているのは作業中のぼっちゃりした男性のおしりとパンツが丸見えだったことだ。

その帰りには、アイスクリームワゴンでアイスを買って、だだっ広い野原の地べたに座って食べた。都会で生まれ育った私は、あれほど広い空と大きな雲と、青々とした芝生を見たことがなかった。心地よい風に吹かれてアイスクリームを口に運ぶことの幸せを、ゆっくりと噛みしめた。

家に着くと、いつものようにティータイムがあった。イギリス人は朝昼晩とおやつの時間に、マグカップになみなみ注いだ紅茶を飲むのだ。

私たち二人は日本から持ってきた和菓子をジョーとアミリアにすすめた。もともと日本食が好きだというアミリアは喜んでくれ、そのお返しと餞別に一冊ずつ自分の本をくれた。

どちらもジェーン・オースティンの作品で、ペアの子は「高慢と偏見」を、私は「分別と多感」を選んだ。それまでに、親が持たせてくれた小遣いで山ほど土産を買っていたが、アミリアがくれたその本が一番の宝物になった。

夕飯の後、ジョーとペアの子はその一週間前に行ったパブにもう一度出かけ、アミリアと私は疲れていたのだから家に留まった。部屋に戻って一人になった私は、楽しかった二週間を思い返し、センチメンタルな気分になっていた。

ジョーとアミリアの家は私の理想というべき家だった。

かわいらしい花々が誘う庭。教会が見える窓のあるダイニング。そして、居心地の良いリビング。壁一面の本棚にびっしり並ぶ本とともにディスプレイされたテレビは、映画を見るとき以外つけられなかった。そのかわりに、ラジオやスピーカーから流れる音楽は途切れることなく、私の心を満たした。また、その家のものは雑然と置かれているようでいて、不思議と秩序を持っているようにも感じられた。それはきっと、家のすべてのものに二人の思い出が詰まっていた、愛されてきたからなのだろう。

窓の外をふと見やると、だんだん暮れていく空が見えた。この窓から空を見るのもこれで最後かと思うと、その一瞬一瞬が愛おしかった。部屋の机が、椅子が、ベッドが、それぞれに影を作っていた。部屋の明かりが消えていたからだ。明かりをつければ、影とも別れなくてはならないような気がして、消したままにしていた。このままずっとこうしたいと思った。その一方で、進まなくてはならないとも思った。

実は私は、半年ぐらい前から志望校のことで悩んでいた。翻訳家を志す上で、大学では英語以外の言語を専門的に学び、活躍のフィールドを広げたいと考えているので、留学制度などがととのっている某大学を志望はしていた。しかし、アメリカにいたのは幼いころのことであまり覚えておらず、海外に一年でも住むということに不安を感じていた。その不安の大半は、ホームシックと外国人だった。外国人というだけで、なんとなく怖気づくところがあった。それは、私が日本人だから。日本のような極東の小国に生まれ育ち、英語もろくに話せない自分に劣等感を抱いていたのだ。

しかし、イギリスに来て、それは間違いだったと気づいた。ジョーもアミリアも、人間と人間として私と向き合ってくれた。決してイギリス人と日本人としてではなかった。そういうふうに向き合うとすれば、お互いの文化に興味を持ち、話をするときだけだった。二人は日本の文化を素晴らしいと言った。COOLだと言った。私はその言葉に感激した。そして、やはり大学では留学したいと思った。私はドイツの歴史や文化、言語に興味があるので、留学するとすればドイツで、専攻はドイツ語だと思うが、その道の選択は間違いなくイギリスが後押しするものだろう。ドイツに留学すれば、イギリスにも来られる。

これは「終わりの始まり」ではなく、「始まりの終わり」だ。

私は部屋の明かりをつけた。家具の影に「束の間」のさよならを告げて。

翌朝、イギリスでの最後の朝食。ジョーが言った。

「私もアミリアも旅が好きなの。アミリアはついこの間までフランスにいたし、私は二十歳のときに世界中を旅したわ。」

私は世界中を旅する自分を想像した。それはきっとすごくエキサイティングなことだろうと思った。

ジョーは続けた。

「外国へ行っていろいろなことを経験して家に帰る。そうすると、自分は大きく成長して帰ってきても、家族からの扱いは同じ。それって不思議な気分よね。」

はっとした。それはまさにそのときの自分の気持ちだった。そして、自分のその気持ちに寄り添うような言葉だった。

「イギリスに来るときは絶対に連絡してね。うちに泊まってもらうわ。」

あたたかい二人の笑顔に、ここが第二の我が家なのだとうれしく思った。そして、必ず帰ってこようと誓った。

その日がたった数年後であることを願って、この体験記を書き終えたい。